

---

# アンパンマンの死

青い鴉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アンパンマンの死

### 【Nコード】

N1127W

### 【作者名】

青い鴉

### 【あらすじ】

アンパンマンは、あるとき、真実を知る。pixivより転載。

ある年から、冬が無くなった。

その次の年の夏。

永遠に溶けないはずの山頂の大雪が溶け出し、町沿いの川が氾濫した。

僕は、みんなを救助した。できるかぎり。

雨の中では僕の力は弱まる。いやたとえもし晴れていたとしても、きつと全ての人を

助けることはできなかったろう。手足が足りなかった。

なにもかもが足りなさすぎて、僕はバイキンマンにさえ助けを求めた。この僕が、バイキンマンに、だ。

もちろん断られた。バイキンマンはずっと笑っていた。笑いすぎてあごがはずれても、ずっと。

食パンマンがドキンちゃんを説得して、バイキンマンをひっぱり出してくれなかったら、

被害はもっと増えていたと思う。

カバ男くんは死んだ。ウサ子ちゃんはカバ男くんのからだにすぎりついて、ずっと泣いていた。

二人がつきあってたなんて知らなかった。僕は、なにもしらなかった。

みんなは氷の魔王の呪いだと言った。

吹雪をあやつる氷の魔王。あいつは強かった。僕が永久に凍りづけにされて、

二度と立てなくされそうになるくらいに。

僕は、怒っていたのだと思う。だから一時の感情に流され、バイキ

ンマンと手を組んだ。

魔王は悪いやつだ。倒さなければいけないんだ。そう頭から信じ込んで、氷の魔王の話の聞こうともしなかった。

なぜ旅人を凍らせるのか？

なぜ殺さずにおくのか？

あんな雪だらけの場所で、何をまもっていたのか？

僕は、なにもしなかった。知ろうとも、しなかった。

川の氾濫は、氷の魔王の呪いなんかじゃない。僕が氷の魔王を倒したからだ。

僕が力まかせに氷の魔王を倒して、彼のまもっていたものを奪ったからだ。

バイキンマンと同じだ。

氷の国。生き物のいない王国。近寄る旅人を凍らせる魔境。

そして、永久にとけない大雪の番人。冬の創造主。

彼は魔王なんかじゃなかった。彼はただそこにいただけだ。ただ強かっただけだ。まもるものにつりあうくらいに。

ある年から、冬が消えた。

僕は異変に気付かなかった。今日は天気がいいですねと声をかけたときの、ジャムおじさんの不安な顔にも。

僕のせいで、たくさんの人が死んだ。僕のせいで。僕のせいで。僕のせいで。僕のせいで。

バイキンマンはひとしきり笑ったあと、僕をおもいきり殴った。ふつとんで、ガラクタの山にぶつかる。

「バーカ！そんなくだらなことを言うためにはるばる俺様の秘密

基地にまで来たのか！」

バイキンマンは怒っているようだった。倒れたひょうしに、天井の無数のレーザー砲が僕を狙っているのが見えた。

おまえが来ることくらい高性能レーダーでお見通しだ。おまえらに見つかったときにそなえて、

迎撃の準備だつてしてあるんだ。バイキンマンは、そんなことは当たり前だと言った。そうなのだろうか？そうなのだろう。

「なのになんだ！この前は『救助を手伝ってください』で、こんどは泣き言をいいにきたのか！」

ふざけるなど叫びながら、バイキンマンは僕を殴った。僕は殴れなかった。もし殴ったら、ぜんぶ

バイキンマンと同じになってしまっただったから。

気を失う前、そうか何も知らなかったのか、とつぶやく声が聞こえた。ちくしょう、という声も。

気付いたとき、バイキンマンはUFOに乗り込むところだった。

すぐにUFOは浮かび上がり、下部から巨大なパンチマシンが出てきた。

僕は目を閉じた。そして唐突に、誰でもいいから殴られたかったのだと気付いた。確かにばかばかしい。

僕を本気で殴ってくれる人が、バイキンマンしかいなかったなんて。

ドカーン。轟音と共に壁を突き破り、僕は吹き飛んだ。いつも僕が

バイキンマンにやっていたように、僕は星になった。

森のなかで僕は目が覚めた。木の枝が数本折れて、地面に落ちていた。からだじゅうが痛かった。

マントもぼろぼろでもう飛べそうにない。顔は完全に潰れている。

おまけに、あたりは暗く、

ひどく寒かった。

「どうしたの！アンパンマン！」  
僕を見つけたのはウサ子ちゃんだった。彼女に見つかるくらいなら、狼に食われるほうがましだった。

もっとも、それは叶わぬ望みだ。僕のからだは狼が好きな味ではない。

ウサ子ちゃんの連絡で、すぐにアンパンマン号がやってきた。バタ子さんが手で顔を付け替えてくれると、なんとか動けるようになった。

「誰にやられたんだい？」「きつとバイキンマンに違いないわ！」  
その通りだ、とは言わなかった。バイキンマンは怒っていた。きつと、今回は突然押し掛けた僕のほうが悪かったのだ。

潰れた顔の中で何かがキラリと光った。

僕はジャムおじさんやバタ子さんにはれないように、こっそりそれを拾った。

丸くて薄い。真ん中に穴が空いている。下手くそな字で「バカへ」と書いてあった。

深夜。僕は倉庫にいた。

以前アンパンマン号の中でこれと同じものを見たことがあった。確かシーディーロムとかいったか。

アンパンマン号の操縦席のコンピュータ。その横に、ぴったりの差し込み口があった。

コンピュータが起動すると、バイキンマンそっくりの顔をした人工知能がディスプレイに現れた。

「ハヒフヘホー！ キヨウモテンサイ バイキンマン！ オレサマ  
二 ハイッテイル ジョウホウハ ヒトツダケダ！ サア、ヨメ！」

一冊の古びたノートが映し出された。表紙は下手くそな字で書かれていた。

アンパンマンに関する考察。

僕は、それを見つめて、しばらくぼうけていた。なぜかはわからないが、懐かしいような、愛しいような、不思議な感じだった。

操縦席には、いまでも低い音が響いている。

一度ページをめくり始めると、止まらなかった。

僕は夢中でそれを読み進めた。

アンパンマンが嫌がること100個、アンパンマンの弱点の顔への攻撃方法、

アンパンチの破壊力、アンパンチへの対抗策……

たくさん項目を読み飛ばした。あの、人助けなんか絶対にしないようなバイキンマンが、こんなものまで渡してくれたのだ。そうまでして僕に見せたいものとはなんだろう。

いくつもの項目の先で、ついに僕の目は止まった。

アンパンマンの誕生。

僕が生まれた理由。そうだ。僕は、いつも、ずっと、それが知りたかった。

分らないまま終わる。そんなのは嫌だと、知らずに口ずさむほどにひどく集中していたからだろうか。僕は背後の物音に気付かなかつた。クリックしようとする手を、誰かが止めた。

「こんなところで何をしているんだい、アンパンマン。風邪をひくよ」

「ジャムおじさん！」

僕は、すぐに罪悪感でいっぱいになった。ジャムおじさんの断りも無く、倉庫に入って、アンパンマン号をいじったのだ。しかも、バイキンマンのくれたものを見るために。もしかしたらアンパンマン号が壊れることだってあるかもしれない。暴走して町で暴れるようにプログラムすることだって、バイキンマンならできるかもしれない。背中に冷たいものが流れた。

僕はどうしたんだろう。こんなことをするなんて。それに、バイキンマンが渡してくれたものがなんであれそれが信用ならないってことくらい、僕が一番よく分かっているはずじゃないか。

でも、ジャムおじさんは何も言わずに、僕に毛布をかけてくれただけだった。

そして、しばらくたって。ジャムおじさんは僕にたずねた。真実を知りたいのかい、と。

ある男の話をしよう。



その男は、パンを作ることが好きだった。

誰よりもパンを作ることが好きで、好きで好きで好きで、それだけが好きだった。

ほかのことは全部、嫌いだった。

だからその男は、誰も住んでいない丘の上に、パン焼き窯と家を作った。

それから、ずっと、ずっと、おいしいパンを作ろうと努力してきた。誰も、食べてくれる人などいなかったのに。

ある日、森で倒れている女の子を見つけた。男は、そのときようやく、試食係が必要だと思った。

その子はパンを食べた。毎日パンを食べて元気になった。けれど、決して笑わなかった。喋ることもなかった。

男は試食係が居ることには満足していたけれど、おいしいとも、まじいとも言わない

試食係には不満だった。それに、男が求める究極のパンを作るためには、いろいろと足りないものがあつたのも、不満の理由だったかもしれない。

ある日、その男は、試食係が水と小麦粉を混ぜてこねているのを見た。

水と小麦粉の配分は、それはもうひどいもので、テーブルも床もびちゃびちゃだった。

なによりひどかったのは、男が世界中から集めてきた酵母菌のうちのいくつか、水浸しになってしまっていたのだ。

男は激怒した。自分でも分らないうちに、試食係の腕をつかんで、

小麦粉の山の

中に叩きつけていた。部屋じゅうが真っ白になった。

自分は何をしているのだ。大切な酵母菌がまだ机の上に残っていたかも

しれないじゃないか。まだ救えたかもしれないのに、だいなしにしてしまったんだぞ。

うるさい。

俺は試食係に怒っているんだ。酵母菌など知ったことか。

真っ白な中で、男は笑った。命よりも大事な酵母菌だったはずなのに、今ではどうでもよかった。

涙が出るほど笑ったのは何年ぶりだろう。思い出せなかった。

白い霧が晴れたとき、試食係も笑っていた。ひどくきれいな笑顔だった。

女の子をここから放り出すのは簡単だ。

だが、この子は水と小麦粉を混ぜたひどいものをパンだと思い込んだまま町に下りるのだと思うと、

男は心底ぞっとした。それだけは避けねばならない。

男はその日から、試食係を、助手にするために、さまざまな混乱を背負うことになる。

また、月日が流れた。試食係はようやく助手と呼べるくらいになった。

男はある日、助手にひとつ質問をされた。

「おじさんの夢はなんだったんですか？」と。男はおじさんと呼ばれるような年に、助手は女の子とは

呼べないような年になっていた。

「笑わないと約束してくれるかい？私は、知性あるパンを作りたかったんだよ」

男は助手に自分の夢を語った。食べる者の好みに合わせて、さまざまに味を変えるパン。

相手の空腹度を知り、さまざまに量を変えるパン。欲しがるものには与え、食わず嫌いの

者の興味を引き、食べることの幸せを思い出させてくれるパン。

言葉を喋り、愛を知り、自分は何のために生まれたのかと悩むパン。

男が夢の全てを語り終えるまで、助手はずっとその話を聞いていた。男がなぜ笑わないのかと聞くと、助手は笑って答えた。だって笑わないと約束したじゃないですか。

助手は好奇心あふれる声で言う。

「ねえ、一緒にパンを作りませんか。私もずいぶんうまくなったんです。もしかしたら、その夢のパンができるかもしれない！」

男は知っていた。知性あるパンを作るには、とても特殊な酵母菌が必要だということ。どれだけ地上を

探しても、そんな酵母菌は無かったのだということ。所詮それは、かなわぬ夢だということ。

それでも、男と一緒にパンをつくることにした。若き日の夢を思い出させてくれた助手のために。

轟音と共に空が裂け。2つの星が地に落ちた。

それは星のようだったが、ただの隕石ではなかった。星のように見えたのは、特殊な小型UFOであり、必要なものを、ある星から、この星に運んできたのだ。

ひとつは険しい山の上に、ひとつは無人の丘の上に。そうセツトされたはずだった。

だが、少しだけ長い時の中で、人は町を作り、男は丘の上に家を建てていた。

一つの星は煙突の中に飛び込み、跳ね回った。そして。パン焼き窯の中で熱されていたパンの中に、落下した。

高温どころか高熱。たちまち湿度が消し飛ぶような過酷な環境は、UFOが運んできたものをだいなしにするには

ほとんど十分だった。だが、それは賢かった。これほど過酷な環境においてさえ、より生存に適した場所へと

移動し、己の能力を発揮できるようにその場所を作りかえることくらいは造作のないことだった。

だが、それとて、無限の柔軟性があるわけではない。最初の一步は、違えることのできない一步であった。

しかし後戻りはできない。今を乗り越えなければ、明日は来ない。たとえ、すべての記憶と、ほとんどの能力を

失うことになっても……絶対に……。

「いたた……いったい、なにがおこったのかしら」

「くうっ……パンはどうなった！パンは無事か！」

パン焼き窯が、内側からゆっくりと開く。それは男が待ち望んだパンであった。叶わぬと諦めかけていた、

夢のパンであった。理屈ではありえない何か、現実そこにあっ

た。すべてのパズルのピースが  
瞬時に組み上げられる感覚。奇跡。いや、そんな陳腐な言葉では言  
い表せない、無限の歓喜。

「ぼく、アンパンマン！」

ディスプレイから光が滲み、機械がブーンという音を吐き出ししてい  
る。

「小型UFOが、僕を運んできたんですね」と、アンパンマンが言  
った。

「僕は、運ばれてきたんですね。バイキン星から」  
そうだ、とジャムおじさんは答えた。

そうか。僕はバイキンマンだったんだ。

僕は、バイキンマンになるはずだったんだ。

送られてきた菌はふたつ。それは、たぶん、大事なことだったはず  
だ。

忘れてはいけない理由が、目的があつたはずだ。

でも、忘れてしまった。僕はバイキンマンにはなれなかった。

僕はパンの中に突っ込んで、そして、パンになってしまった。

アンパンマンになってしまった。

床に涙が落ちた。いつのまにか、視線は床へと落ちていたらしい。  
光沢ある床にパンが映り込んでいた。まるで自分ではないようだっ  
た。

いつも笑っている顔。何も知らない顔。自分を正義の味方だと  
思っている顔。バイキンマンとは似ても似つかない、パンの顔。

ふいに、僕は自分がもうパン無しでは生きられないことに気づいた。バイキンマンが以前、僕に対して、弱いと言っていたのを思い出した。

そうだ。僕は確かに弱い。

自分でそれを知ろうとしておきながら、真実にうちのめされるほどに。

アンパンマンが黙ってしまつと、ジャムおじさんはまた静かに語り始めた。

バイキン星が、他の星にふたつの菌を送り込んで来る理由は、菌を選別するためだという。

星に運ばれた菌は、その星に適した姿に進化し、バイキンマンとなる。二人のバイキンマンは、

生まれつき憎みあう。高い知能と憎悪。バイキンマンたちは、その星の全てを己のために利用し、

気まぐれに支配し、気まぐれに破壊する。そして、どちらかが死ぬまで戦うのだ。

戦いの勝者はバイキン星へと帰り、長い長いバカンスを得る。これは、ドキンちゃんから聞いた話だ。

ドキンちゃんは気まぐれだが、嘘はつかない。真実だと思つていいと、わしは思う。

アンパンマンはただ聞いていた。二人のバイキンマン。戦う運命。どこか遠い国の話のようだった。

わしは、今までに幾度もバイキンマンを消滅させるチャンスに恵まれた。

実を言えば、最初に会ったときから、バイキンマンが石鹼に非常に弱いであるうことには

見当がついていた。だから、そうしようと思えば、わしはその戦いを終わらせることができたはずじゃ。バイキンマンを消滅させ、アンパンマンを勝たせる。だが……

ジャムおじさんはそこで口を止め、顔を歪めた。

勝者は、バイキン星に連れ戻される。例外無く。反重力装置、物質圧縮装置などの

高度な科学力を持ったバイキン星の使者に対し、わしらのような野蛮人の抵抗は

無意味じゃ。じゃから。わしは。アンパンマン、わしはな……

さきほどの話で呆然としていたから、アンパンマンにはジャムおじさんが何を言いたいのか

とっさにはわからなかった。だが、ジャムおじさんの声が震えていることに気付いて、

アンパンマンはなんとか話を理解しようと思った。バイキンマンとアンパンマン。

倒せたはずのバイキンマン。勝者はバイキン星に連れ戻される。つまり……

わしはな、アンパンマン。アンパンマンに、お前に、ずっとここにいて欲しかったんじゃよ。

それは、一人の男の偽らざる本心だった。運命を背負ってこの星にやってきた菌を、

ただ己の夢に重ね、その傍らに留め置こうとした。決して愛ではな

い。エゴだ、とジャムは思う。

バイキンマンに対し、アンパンマンは弱い。アンパンマンを勝たせ、しかし勝ちすぎないように  
するには、アンパンマンの弱点である顔の補充を、自分が引き受けねばならない。

バイキンマンの襲撃を受けてみて初めて、相対することの困難さが理解できる。

敵は、強い。アンパンマンの顔を作る程度ならともかく、バイキンマンのUFOと互角に  
渡り合おうとするなど狂気の沙汰だ。だが、もう決めたことだ。やらねばならなかった。

今まで見下していたはずの大量生産を、突然心変わりしたふうを装って開始した。

秘密基地と秘密兵器を作り上げるには、どうしても先立つものが必要だった。

バタコは町の人たちがパンを食べて喜ぶのがうれしいと言ってくれた。こんなにおいしい

パンですもの、食べないなんて損ですよ、と。だが、もうバタコは子供ではない。

わしの変化にも、薄々気づいていたはずだ。それでも、育ての親という立場を利用し、

アンパンマンのための道具と考えたことが無かったといえるだろうか？

それに、倒せるはずのバイキンマンを放置してきたことで、さまざま  
まな者が迷惑を受けるのを、

ときには悲嘆にくれるのを見てきた。アンパンマンにそれを解決さ



せることで、世間は  
わしらに同情以上の感情、尊敬を持って接してくれている。だが、  
それが偽善だと

ジャムは知っている。もっとも自分が憎んでいた人種に、今の自分  
はなってしまうているのだ、と。

だがそれももう終わる。アンパンマンが真実を知った今となっては、  
何の意味も無いことだ。

「ジャムおじさん」

アンパンマンはジャムおじさんをまっすぐ見て言った。

「バイキンマンは、僕のことをバカだと言いました。ひとつは、僕  
が何も知らなかったから、  
もうひとつは、僕に勇気が無いからだと思います」

「勇気？」ジャムは思わず問い返していた。あの恐ろしいUFOと  
空中戦をするアンパンマンを  
地上から見ている身としては、アンパンマンに勇気が無いなどとは  
思えなかった。

「勇気です。僕には、アンパンマンには、覚悟する勇気が足りなか  
ったんだ」

ジャムおじさんは驚いていた。目の前にたっていたのは、先ほどま  
でのアンパンマンでは

無いように見えたからだ。その瞳にはもう涙は無く、その肩にはも  
う脱力はなかった。

眉はきりりとしていて、鼻はおいしそうに輝き、茶色いマントが風格を醸し出している。

「僕は、自分がやったことにうろたえていました。後悔もしました。僕の方は、本当に僕が使っているものなのか。自信を失って、自分が分からなくなつて、迷っていました。でも、僕わかつたんです。だから、泣かないでください。ジャムおじさん」

言われて、ジャムおじさんは自分が泣いていたことに気づいた。

「僕は、アンパンマンです。いままでも、これからも、ずっと、アンパンマンです。バイキンマンの悪さは、僕がやめさせます。みんなが笑って暮らせるように、毎日パトロールします。おなががすいた子がいたら顔を食べさせてあげます。顔が濡れても絶対にあきらめません。マントが破けても降参しません。」

僕は平和のために戦います。いつもどおりに」

アンパンマンはジャムおじさんを抱きしめた。思ったよりも小さいなど、思った。僕が守ってやらなくちゃ、とも。

「僕は逃げたりしません。だから、泣かないでください。ジャムおじさん」

アンパンマンは微笑んだ。ジャムおじさんはなんとか涙を止めよう

と思ったが、  
どうやら止まりそうになかった。みつともないな、とジャムおじさ  
んは思った。

だが、どんなにみつともなくても、自分がいま幸せだということだ  
けは確かなのだろうとジャムは思う。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1127w/>

---

アンパンマンの死

2011年10月3日08時47分発行